

文化間有効性尺度 (日本語版) についてのノート

日向 美以子・菊池 章 夫

Notes on a Japanese Form of the Scale for Intercultural Effectiveness

Miiko HIMUKAI and Akio KIKUCHI

A Japanese form of the scale for intercultural effectiveness (Walter *et al.*, 1995) with 2 subscales, interpersonal relationship and intercultural adaptability, by 10 items each was constructed through I-T correlational analysis. The α -coefficients and retest-reliabilities of those subscales were quite enough for practical use. High school students of foreign language major showed high intercultural adaptability score than other students. The high validities were found through examining the correlations between this form and International Understanding Scale (Suzuki *et al.*, 2000), KG-Survey of Personal Values (Gordon & Kikuchi, 1975), KA-Scale of Self-Conscious Affect (Kikuchi & Arimitsu, 2006), Scale of Group Identification (Karasawa, 1991), and Collectivism Scale (Yamaguchi *et al.*, 1995).

文化間有効性のEモデル

自分の文化とは違った文化と接した際にうまくやっ
ていけるかどうかには、当人の持っているスキルと資
質とが関係していると考えられる。このスキルと資質
とを文化間コンピテンス intercultural competenceと
呼ぶが、この2つによって違った文化との接触場面で
の成功や失敗が左右される。そして、この成功や失敗
の程度を文化間有効性 intercultural effectiveness と名
づけている (Dodd, 1998)。言い換えると、文化間有
効性は文化間コンピテンスの有無によって違ったもの
になる。

この意味での文化間有効性について、それが 1) 仕事
の成果 task performance 2) 対人関係形成力 interpersonal
relationships 3) 文化間対応力 intercultural adaptability の3
つの要素から構成されているとするのが、文化間有効性
についてのEモデル (Walter, Choonjareon, Bartosh & Dodd, 1995)
である。英文字Eの3本の横軸に3つの要素を当て、縦軸に
文化間有効性を入れることからこの名がある。この場合
に、「仕事の成果」は当人がどのような仕事について

いるかによってその内容は別々のものになる (派遣社
員と留学生とでは、その仕事の内容はほとんど別のもの
である)。これに対して「対人関係形成力」と「文化
間対応力」とは、当人がどのような仕事についてい
るかに関係なく、どのような立場の個人についても問
題にすることができるものであろう (この2つは、派
遣社員であろうが留学生であろうが欠かせない)。

この考え方によれば、「対人関係形成力」には、相手
との友好的な関係・情動のコントロール・ユーモアの
センス・相手の要求についての感受性・共感・相手への
配慮・他者への信頼・リーダーシップ・見知らぬ人と
の肯定的な関係・同僚との協力関係・よい家族関係・
自民族中心的態度や偏見を持たないことなどが含まれ
る。「文化間対応力」では、柔軟性・成熟性・相手文
化についての知識・言語的スキル・判断を急がない態
度・忍耐力・相手文化への尊敬・開放的な態度・あい
まいさへの耐性・適切な社会行動などが内容である。

文化間有効性尺度

この文化間有効性を、対人関係形成力と文化間対応

力との2つの尺度を用いて測定しようとするのがEモデルによる文化間有効性尺度 Scale With E-MODEL for Intercultural Effectiveness である (Walter *et al.*, 1995)。この尺度では上記のような内容についてそれぞれ11項目、合計22項目 (Table 1を見よ/内10項目が逆転項目) に対して「5. よく当てはまる」から「1. 全く当てはまらない」までの5件法で回答が求められるようになっている。この尺度は、もともとは企業の海外派遣要員の選抜のために構成されたという事情から、ややこうした点での項目が多い感じがあるが、上で述べたようなことから、より広い対象に適用可能な尺度と考えられる。なお、この尺度の原版 (英語版) の構成手続き (例えば、この22項目がどのような手法で選択されたかなど) については現時点では公表されていない部分が多い。このために以下では、この22項目を文化間有効性の項目プール (項目群) として考え、検討を加えることとした。

このノートの目的は、この文化間有効性尺度の日本語版を作成して、その信頼性や妥当性に検討を加えた

結果を報告することである。その際に、データ収集の対象となったのはI県立大学の学生とK県立高校の生徒である。データの収集は2004年の7月から2005年の7月にかけて行なわれた¹⁾。検討の際の対象数は検討の観点ごとに違うので、それぞれの場合に述べることとする²⁾。

日本語版の尺度構成

原版 (英語版) の22項目を筆者ら2人が翻訳して日本語版を作成した。この際、この版を比較文化的研究に用いることは予想していないので、訳し戻し法などによる検討は行なわなかった。この日本語版をI県立大学生76名 (男子26名・女子50名) とK県立高校生215名 (男子75名・女子131名・不明9名) に実施したデータについて、2尺度別の得点とそれぞれの項目への回答との間でI-T相関係数を算出した結果がTable 1に示されている。この2尺度について1項目ずつ (Table 1の*の項目) が有意の水準に達しないという

Table 1 文化間有効性尺度の項目とI-T相関分析結果

項目番号	相関係数 (r)
対人関係形成力	
1. 初めて出会った人びとの大半について、よりよく理解しようと努めている。	.43**
3. 大体のところ、他人との関係を作り上げていくのが上手である。	.38**
5. 他人と意味のある会話を交わすのはむずかしいことだと思っている。	.31**
6. 友人との間で対立が起きたときには、それを避けようとする。	.21**
7. 他人はこちらのことがよく分かるまでは、こちらを信じようとはしないものである。	.24**
8. 他人との付き合いでは、とても我慢強い。	.28**
*. 話すときにはいつも、先手を取るようになっている。	.10
10. 大体のところ、他の人びとの抱えているトラブルに共感することができる。	.29**
12. 初めて出会う相手との付き合い方には、おおむね自信を持って対応している。	.46**
13. 多くの人の集まった所で初めての人たちに出会っても、たいへんイライラしたりしない。	.47**
14. 自国の人びとよりも外国の人びとと友人になることが、自分にとっては大切である。	.22**
文化間対応力	
2. 外国の人びとなどの見知らぬ人が周囲にいると、神経質になる。	.46**
4. よその国を訪ねてみたい。	.36**
9. 外国語を勉強する必要は、まったく感じない。	.31**
11. いつも、自分のライフスタイルを変えることには抵抗している。	.31**
15. 相手の考え方の筋道を知るのが、たいへん好きである。	.19**
16. 外国人などの見知らぬ人を信用するのは、一般的にいて賢いことではない。	.28**
17. いつも、変化にたいへん上手に対応している。	.42**
18. 外国人などの見知らぬ人が周囲にいると、落ち着きがなくなる。	.47**
19. これまで行ったことのない場所に出かけた際には、ものごとが本来あるべきようにキチンとしていないとイライラする。	.31**
*. 相手が率直な答え方をしなかったり、あいまいであやふやな振る舞いをしたりするのが嫌いである。	.05
20. 旅行に伴うストレスやトラブルが面倒なので、今いる場所のほうが居心地がよいことが多い。	.44**

注) **p<.01 5・6・7/2・9・16・18・19・* (19の次)・20は逆転項目

結果になった（この結果は、大学生・高校生別に計算した場合にもほぼ同じであった）ので、この2項目を除いてそれぞれ10項目で日本語版を構成することとした。Table 1に示した項目の前の数字は、この日本語版の配列順である。

同じ大学生と高校生のデータを用いて2つの尺度間の積率相関係数を求めたところ、 $r = .52$ であった。この2尺度（対人関係形成力尺度・文化間対応力尺度）は相対的に独立してはいるものの相互に関連するところの多い関係にあり、この点で文化間有効性尺度としてまとめることのできる尺度であるといえる。

また同じデータによって、この日本語版について「2因子相関モデル」を設定して確認的因子分析を行った³⁾。このモデルのRMSEAは.075で十分な適合性のあることを示した（.10未満で適合的）し、 χ^2 値も443.799で有意（ $p < .000$ ）であった。しかし、GFI（.862）とAGF（.829）とではやや不十分な結果（いずれも.90以上が適合的）である。この場合にも、2尺度間の相関係数は.60で、2つの尺度が相互に関連していることを示した。2尺度の項目別の因子負荷量から見ると、対人関係形成力尺度での項目6・7・14、文化間対応力尺度の項目15・16で、いずれも負荷量が.30を割っていた。これらの項目を除くことで2つの尺度の信頼性が高まり、その妥当性も高くなる可能性があるといえる。しかし他方、項目数が少なくなることで信頼性が低下する面もあり、ここでは差し当たりそれぞれの尺度について10項目での検討を続けることとした。

信頼性の検討

上と同じ大学生と高校生（合計291名）のデータを用いて、2つの尺度の α 係数を算出した。その結果は、対人関係形成力尺度についての $\alpha = .65$ 、文化間対応力尺度では $\alpha = .70$ であった。この値は項目の内容が多様であることを考えると適度なものであり、2尺度とも内的整合性があるといえる。

K県立高校生85名（男子15名・女子66名）を対象に2週間間隔で2度の調査をして、再検査信頼性を検討した。得られた再検査信頼性係数は、いずれの尺度についても $r = .81$ で十分な値であった。2尺度とも高い安定性があることになる。

妥当性の分析

この尺度の妥当性を分析するために用いたのは、1) K県立高校の学系（外国語学系と人文・理数学系）別の得点の比較 2) この尺度と関連すると予想される他の尺度との関連の分析 である。

1) 学系間の比較：K県立高校の生徒215名を外国語学系（104名）と人文・理数学系（111名）とに分けて、その平均値などを分析した。結果はTable 2にあるとおりで、文化間対応力尺度について外国語学系の生徒の平均値が高かった。対人関係形成力尺度については、2つの学系の間で差は見られない。この結果は、外国語学系の生徒のほうが外国文化についての知識が多く、この点での関心や興味も高いことからきいて考えられる。また、国際交流イベントなどへの参加などを通じて、文化的背景の違った人びとと接する機会が多いのもこの学系の生徒たちである。

Table 2 学系別の文化間有効性尺度得点の比較

	人文(n=111)	外国語(n=104)	t値
対人関係形成力	31.00 (4.74)	31.55 (5.01)	.83n.s.
文化間対応力	31.82 (4.89)	35.73 (5.08)	5.75**

注) ()内は標準偏差
** $p < .01$

2) 次の5つの尺度を用いて、妥当性の分析を行なった。これらの尺度の信頼性や妥当性は、いずれも作成者らによって確認されている。

a) 国際理解測定尺度（鈴木・坂元・森津・坂元・高比良・足立・勝谷・小林・檀淵・木村，2000）：日本国内ユネスコ委員会の国際理解教育の基本目標をもとに9下位尺度・74項目から構成されている尺度である。その内容（カッコ内は項目数）は、「他国民・他民族に対する感情（10）」「平等意識（8）」「他国文化の理解／理解（10）・関心（8）・共感性（6）」「世界連帯意識の育成と人類の共通課題への関心や認識（10）」「国際協力機関への協力的態度（6）」「外国語の理解／理解（8）・関心（8）」である。回答は「まったく当てはまらない」から「大いに当てはまる」までの5件法で求められ、高い得点がこれらの内容について肯定的であることを示している。

この尺度を文化間有効性尺度とともに67名（男子22

名・女子45名)のI県立大学生に実施し、この2尺度間で積率相関係数を求めた結果がTable 3に示されている。結果は、文化間有効性尺度の2尺度と国際理解測定尺度のすべての下位尺度との間にプラスの有意の関係が認められた。文化間有効性尺度の得点の高いものは、国際関係についての理解や関心が高く、こうした問題に肯定的な態度を持っていることが明らかである。

b) 個人的価値尺度 (ゴードン・菊池, 1975) : この尺度はライフスタイルの一部を測定しようとするもので、そこで問題になっているのは実際の・達成的・多樣的・決定的・秩序的・目標指向的の6つの価値である。この尺度では、この6つの価値を表現する90の項目が3つずつ組にされたものについて順位をつける強制選択法で回答が求められる。この中で、「自分の所有物に注意を払う」「十分ペイすることだけをやる」といった実際の価値や「たいへんキチンとした人間である」「計画的な生活を送る」などの項目で示される

秩序的価値を高く評価する者は、文化間有効性尺度の得点が低くなると予想される。プラスの関係が予想されるのは、「これまでやったことがないことをやる」「さまざまな多様な経験をする」などで示される多樣的価値である。

この個人的価値尺度と文化間有効性尺度とを190名(男子69名・女子121名)のK県立高校生に実施し、この2尺度間で積率相関係数を求めた結果がTable 3に示されている。結果は予想通りで、特に文化間対応力尺度の場合にこのことがはっきりしている。文化間対応力の得点の高い者は多樣的価値を高く評価する一方で、実際の・秩序的価値についてはそれを低く見る傾向が認められる。

c) 自己意識的感情尺度 (菊池・有光, 2006) の一部: この尺度はシナリオ方式を用いて、6つの自己意識的感情(对人的負債感・個人的苦痛・罪責感・恥・役割取得・共感的配慮)を測定することが目指さ

Table 3 文化間有効性尺度と他の尺度との相関係数

	対人関係形成力	文化間対応力
国際理解測定尺度 (n=67)		
他国民・多民族に対する感情	.61**	.72**
平等意識	.38**	.38**
他国文化の理解/理解	.39**	.44**
/関心	.39**	.50**
/共感性	.31**	.45**
世界連帯意識の育成・人類共通課題への関心、認識	.43**	.50**
国際協力機関への協力的態度	.55**	.62**
外国語の理解/理解	.55**	.41**
/関心	.42**	.50**
個人的価値尺度 (n=190)		
実際の	-.21**	-.24**
達成的	-.07	-.11
多樣的	.12	.32**
決定的	.04	.03
秩序的	-.02	-.17*
目標指向的	.06	.04
自己意識的感情尺度 (n=47)		
役割取得	.01	-.03
共感的配慮	.21	.22
集団同一視尺度 (n=49)	-.26	-.36*
集団主義尺度 (n=145)	-.06	-.52**

注) **p<.01 *p<.05

れている。具体的には、「友人との約束をすっぽかした」といった12場面で、この6つの感情（自分より劣った人間だと思ふ・ドキドキして気分が落ち着かなくなるなど）をどの程度感じるかを5件法で聞いている。今回はこの中から、共感の認知的側面である「役割取得」とその感情的側面である「共感的配慮」とをとり上げた。違った文化の相手についての肯定的な態度の背景には、性格的要因としての「共感」があると考えられるからである。

この尺度と文化間有効性尺度とを47名（男子16名・女子31名）のI県立大生に実施した結果について、2つの尺度間の積率相関係数を求めたデータがTable 3に示されている。対人関係形成力尺度と文化間対応性尺度の両方とプラスの関係にある（対象数が少ないために、いずれも有意ではない）のは「共感的配慮」であって、「役割取得」ではこうした関係は見られない。文化間対応力の高さの背景には、共感の感情的側面である「共感的配慮」の気持ちがあるという可能性がある。

d) **集団同一視尺度**（唐沢，1991）：内集団への同一視を測定しようとするのがこの尺度の目的である。「あなたは典型的なこの集団の人だといわれると言われたら、よい感じがしますか」「あなたにとって本当に大切な友人はこの集団外・集団内の、どちらに多くいますか」などの12項目を用いてこのことを測定しようとしている。回答は「まったく…でない」から「非常に…である」までの7件法で求められる。この場合に「内集団」を具体的に何にするかは調査の目的によることだが、今回は調査対象がI県立大生であったことから「県立大」を内集団として用いた。得点は集団に対する同一視得点（IDgroup）と成員に対する同一視得点（IDmember）とが得られるが、今回はこの2つの合計点を用いた。

I県立大生49名（男子16名・女子33名）についての2つの尺度（文化間有効性尺度と集団同一視尺度）との間の積率相関係数は、Table 3に見るようになぜかマイナスの関係であるが、有意のもの（ $p < .05$ ）は文化間対応力尺度だけである。文化間対応力尺度の得点の高いものは、自分の属する内集団との同一視が低く、むしろ目を外の集団に向けているといえる。

e) **集団主義尺度**（ヤマガチ・クールマン・スギモリ，1995）：を決めるときに自分の気持ちよりも自分の属する集団のメンバーの気持ちを先に考える傾向を

集団主義と呼ぶが、この尺度はこの意味での集団主義の程度を測定しようとしている。この場合にも、どの集団を対象とするかによって結果に違いが出ると考えられるが、この尺度では「友人集団」がそれになっている。項目としては「自分の友人集団のために自分の利益を犠牲にすることはない」「友人集団の仲間と意見の不一致を生じないようにする」など14項目から構成され、「全く当てはまらない」から「非常によく当てはまる」までの5件法で回答がされるようになっていいる。このことからこの尺度は、自分よりも友人仲間を優先する傾向を測定しているといえる。

この尺度と文化間有効性尺度とがI県立大生145名（男子36名・女子109名）に実施された。そこから得られた積率相関係数はTable 3に示したとおりで、文化間対応力尺度についてマイナスの有意の関係（ $p < .01$ ）が見られる。文化間有効性尺度で問題にしている「文化間対応力」は周囲の対人関係を越えたより広い関係と状況を視野に入れたものであることから、こうした結果が得られているのであろう。

ここで見てきたデータの中で、高校生の学系間の差（外国語学系で文化間対応性尺度の得点が高い）は今回作成した尺度の併存的妥当性を示し、a) 国際理解測定尺度とのプラスの関係は、その収束的妥当性を示すものと考えることができる。また、b) 個人的価値尺度やc) 自己意識的感情尺度の一部（共感的配慮）とのプラスの関係、そしてd) 集団同一視尺度やe) 集団主義尺度とのマイナスの関係は、いずれもこの日本語版の概念的妥当性を示す資料として理解できるものである。

「文化間」と「異文化間」

これまで、「intercultural」という表現にはしばしば「異文化間」という訳語が当てられてきている。しかしこの表現をキチンと見れば、そこには「異」という意味は含まれてはおらず、あるのは「間」ということだけであるのはすぐに分かる事実である。Intercultural effectiveness に「文化間有効性」という訳語を当てたのもこのことからきている。さらにいえばこのように訳すことで、自分たちの周囲に多くの「異文化」があることに気づかされるのである。この場合の「異文化」は決して外国文化だけのことではない。性や年齢、地域や学校・病院などの施設、職

業や家族などは、こうした意味での「異文化」を担っているといえる。信頼性・妥当性が確認された文化間有効性尺度（日本語版）が、この種の「異文化間」問題にどう役立つかを考えるのが次の仕事である。

(注)

1) 今回のデータを提供して下さった学生・生徒の皆さんに感謝する。データ収集にお力添えくださった不来方高校の松尾美幸先生にお礼申し上げる。

2) ここで用いたデータは、日向 (2004) のデータに一部分新しいものを加えて計算し直したものである。

3) 確認的因子分析の計算をして下さった佐々木誠さんにありがとうを申したい。

文献

Dodd,C.H. 1998 *Dynamics of Intercultural Communication* 5th ed., McGraw-Hill.

日向美以子 2004 文化間有効性尺度作成の試み 岩手県立大学大学院社会福祉学研究科・修士論文 (未発表)

唐沢 穰 1991 集団同一視尺度 堀 洋道 (監修)・吉田富二雄 (編) 2001 「心理測定尺度集Ⅱ」サイエンス社 221-225

菊池章夫・有光興記 2006 新しい自己意識的感情尺度の開発 パーソナリティ研究 14巻2号 (印刷中)

菊池章夫・ゴードン, L.V. 1975 個人的価値の測定 ゴードン, L.V.・菊池章夫 「価値の比較社会心理学」 川島書店 65-76

Walter, M., Choonjaroen, N., Bartosh, K., & Dodd, C. H. 1995 Scale With E-MODEL for Intercultural Effectiveness. In. Dodd,C.H. 1998 *Dynamics of Intercultural Communication* 5th ed., McGraw-Hill, 184-185.

鈴木佳苗・坂元章・森津太子・坂元桂・高比良美詠子・足立にれか・勝谷紀子・小林久美子・檀淵めぐみ・木村文香 2000 国際理解測定尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 日本教育工学雑誌 23巻4号 213-226

ヤマグチ, S.・クールマン,D.M.・スギモリ,S. 1995 集団主義尺度 (改訂版) 堀 洋道(監修)・吉田富二雄(編) 2001 「心理測定尺度集Ⅱ」 サイエンス社 242-245